

## 漱石の吾輩とグレイのセリマ

Junko Higasa 2014.8.23

『吾輩は猫である』の第二章で、漱石はイギリスの詩人であるトーマス・グレイの名を挙げた。彼には友人の猫の死を描いた「Ode on the Death of a Favourite Cat, Drowned in a Tub of Gold Fishes(金魚鉢で溺れた愛しの猫に捧ぐ)」という詩がある。金魚鉢の中で、鱗を透かして黄金色を放つ金魚に心を奪われた上品な猫のセリマは、その金魚を捕ろうとして足を滑らせ、水の中に落ちてしまう。ここで一つ断っておくが、この「金魚鉢」は「Lake」と表現される。したがって便宜的に金魚鉢という日本語を使うが、実際は金魚水槽である。

その詩の中で、セリマの残した教訓として「目を奪い心惑わせるものは、たとえ黄金であろうと自分にとって必ずしも手に入れるに相応しいものとは限らない。一步の間違いで取り返しのつかないこともある」と語られるが、それは人間の持つもの全てに好奇心を持ってしまった吾輩にも当てはまる。普通の猫より知識の高いことを自負しだした吾輩は、人間のようにクサクサするからとビールを飲んで、ついにはセリマの死の場面同様に、甕に落ちて溺れてしまうのである。

この教訓が示すように、『草枕』以降の個性発展社会で、金田のような実業家は一步を間違えて人生を狂わせ、富子のような女は一步の違いで幸せを逃す。目の前の誘惑に足をすくわれないことが肝心だ。